

風にのったヤン・フェツテグラフ

昔むかし、あるところに、ヤン・フェツテグラフという若者がいました。ヤンは、長い旅を終えて、家にむかって歩いていました。ところが、道にまよって、ある高い山のふもとに着いてしまいました。あたりには家一軒なく、人のすがたも見えません。

（こまったことになったなあ）

やがて、すっかり暗くなり、おなかはぺこぺこです。右の道、左の道と、あちこちさまよい歩きましたが、何も見つかりません。

とつぜん、遠くのほうから、糸車のまわる音が、コトコトコトコトと聞こえてきました。音のするほうへ歩いていくと、やがて、ほらあなの前に出ました。

ほらあなの中で、年とったおばあさんが、糸車を回して、楽しそうに糸をつむいでいました。おばあさんの足は、いつも糸車のペダルを踏んでいるらしく、平べったく大きくて、下くちびるは、いつも糸をしめらせているらしく、大きく前に突きだしていました。

ヤンがほらあなに入っていくと、おばあさんは、

「何の用だね。この世ができてからというものの、私の家の敷居をまたいだのは、おまえがはじめてだよ」といいました。ヤンは、

「うちに帰るとちゅう、道にまよってしまいました。おなかがぺこぺこで、くぎの頭でも食べてしまいたいほどです」と答えました。おばあさんは、

「じゃあ、わたしがごちそうしてあげよう。まあ、おすわり」といって、あつく切ったパンにバターをたっぷりぬって出してくれました。おいしい飲み物も、つばにいったい入れてくれました。

ヤンは、ありがたういただき、おなかがいっぱいになると、おばあさんと楽しくおしゃべりを始めました。

「おばあさんは、ここでひとりぼっちで住んでいるんですか」

「いやいや。四つの風といっしょに住んでいるんだよ。わたしは、もの知りグレーテさ」

ヤンは、目を丸くして、

「四つの風と住んでいるんですって。それはどういうことですか」とききました。

「四つの風っていうのはね、わたしの四人の息子たちさ。ちよつと待っておいで。もうすぐ帰ってくるから」

すると、一分もたたないうちに、風がゴーゴーふいてきて、鼻さきがこおってしまいそうなほど冷たい空気がまいこんできました。

「ほら、北風が帰ってきた。海をこえて旅をしてきたのさ」

おばあさんが、そういったとたん、そこに北風が立っていました。長い髪は風でくしゃくしゃで、ひげには、こしような実や塩がいっぱいくっついていきます。あられ

に打たれたような恐ろしい顔の、いかめしい男でした。まるで雪の中を歩いてきたように見えました。

つづいて、またふたつの風があらしのように飛びこんできました。おばあさんのつむいでいた糸がふき飛んでしまいそうになりました。ふたつの風は、それぞれ反対の方向からやってきて、同時におばあさんにあいさつしました。

「ただいま、おかあさん。お元気ですか。ところで、うちの末っ子はどこにいるんですか」

「わたしは元気だよ。西風、おまえも元気かい。東風、おまえはどうだね。末っ子の北風はもう帰ってきているよ。南風ももうじき帰ってくると思うがね。あの子はいつも帰りがおそいんだから。しょうがない子だよ」

おばあさんがそういったかと思うと、とつぜんあたりがもかもかと温かくなりました。ヤンは、思わず眠くなつて、大あくびをしました。

そのとき、南風があらわれました。すらっとした若い男で、金のひげをはやし、長いまき毛をたらし、緑のマントを着ていました。おばあさんは、

「こんなにおそくまでどこにいたんだね。いつまでたつても帰つてこないんだから」といいました。

「おこらないでよ。ぼくは、〈死ぬことのない国〉へ行ってきたんだ」と、南風は答えました。ヤンは、思わず、

「〈死ぬことのない国〉だつて。そんな国へ行つてみたいなあ」とつぶやきました。南風はそれを聞きつけて、

「あした、またそこへ行くから、おまえもいつしよに行くかい。だけど、よく気をつけて、ぼくのいうとおりにするんだよ。そうでないと命を失うことになるんだから」といいました。

「だいじようぶ。いわれたとおりにするよ」

つぎの朝、まだ日がのぼる前に、ヤンはしたくをして南風を待っていました。しばらくすると、南風が起きだしてきて、いいました。

「ぼくのいうことをよくお聞き。ここに皮のぼうしがある。これをかぶって、ぼくにぴたりくつついているんだ。でないと、迷子になるからね。それから、ぼうしが飛ばないように、よく気をつけるんだよ。地面におりる前にぼうしが飛ばされてしまうと、きみは落っこちて、首の骨を折ってしまうからね」

「ご心配なく」

ヤンはそういうと、さつそくぼうしをかぶりしました。そのとたん、ヤンのすがたは見えなくなりました。

南風は、マントをはおりました。すると、すさまじいいきおいで風が吹きはじめ、うちの中のもの何かも吹きとばされてしまいました。南風は、わあっと外へ吹きだしていき、ヤンもいつしよに飛びだしていきました。

ふたりは何時間も飛びつづけました。やがて、遠くのほうに、美しいお城が見え

てきました。南風はヤンに、

「ここが、《死ぬことのない国》だ。あのお城に王さまが住んでいるんだ」といいました。ヤンは、

「お城まで飛んでいこうよ。近よって、よく見たいんだ」といいました。

「よし、そうしよう」

南風は、ツバメのように、すうつとお城へ向かって飛んでいきました。

お城まで来ると、風のいきおいで、まどがひとつ、パタンとあき、南風とヤンは、おひめさまの部屋に飛びこみました。すると、テーブルや、たなの上のかざりものや、けしきよう道具が、まいあがったり、ひっくり返ったりして、部屋の中の人たちは、大さわぎになりました。

ヤンはあわててしまい、うつかりぼうしを飛ばしてしまいました。そのとたん、ヤンは床に落ち、すがたがおひめさまの前にあらわれました。南風は、そのときにはもう、部屋を飛びだして行つてしまいました。

おひめさまは、ヤンに、

「あなたは、どこからどうやって、ここにいらつしやつたの」とききました。

ヤンは、森で道に迷ったこと、物知りグレーテの息子の南風に連れられて、ここまで飛んできたことを話しました。《死ぬことのない国》の王さまは、ヤンのことをとても気にいり、このままここにいて、ひめのむこになってくれないかといいました。ヤンは、よろこんでしようしました。

ヤンとおひめさまは、しあわせに暮らしました。

一年たつと、ヤンは、お母さんのことを思いました。そこで、王さまに、

「いちどうちに帰って、年とつた母のようすを見てきてもよろしいでしょうか」といいました。王さまは、

「帰ってみるのはかまわないが、そこには、おまえのことを知っている人間はだれもない。おまえは、おまえが思っているよりずっと長く、ここに住んでいるのだ」といいました。

けれども、ヤンは、どうしても帰りたくてなりませんでした。そこで、王さまは、自分の持つているいちばんいい馬を、ヤンのために用意させました。そして、ヤンを見送って、こういいかせました。

「いいかい。だれにどんなにうまいことをいわれても、けっしてこの馬からおりてはいけない。もしおりてしまったら、こうかいすることになるからね」

「ご心配なく」

ヤンはそう返事をして、さつそく出かけました。

生まれ故郷についてみると、まわりの草も木も、人も動物たちも、みんな知らないものばかりでした。ヤンがむかし知っていた人たちはみんな死んでしまい、おはかに入っていました。

ヤンは、市長さんのところに行きました。市長さんは、分厚いノートを何冊もめ

くって調べましたが、ヤンの名前はありません。さがすのをやめようとしたとき、市長さんの手に、たいへん古めかしいノートがさわりました。半分ほどねずみに食いちぎられ、ほこりまみれで、七〇〇年も前のものでした。そこに、ヤンの名前がありました。

市長さんは驚き、ヤンをそんけいのまなざしでながめていました。

「どうぞ、私のうちに来て、食事をめしあがってください。そして、あなたの身の上話を聞かせてください」

ヤンは、

「いや、それにはおよびません」といって、くるりと向きを変え、馬からいちどもおりないで、さつさともどって行きました。

どんどん馬を走らせていくと、ひとりのおじいさんが、荷車の下敷きになつて苦しんでいました。荷車には、使い古しのこわれた車輪がいっぱい積んでありました。おじいさんは、あわれっぽく大声でわめきながら助けを求めています。ヤンは、すっかりきのどくになつて、

「待つてなさい。すぐに助けてあげるから」というと、馬からとびおりて、おじいさんを荷車の下から救いだしてやりました。そのとたん、おじいさんは、ヤンの肩をしっかりとつかまえていました。

「さあ、やつとつかまえたぞ、ヤン!! フェッテグラフ。もう七百年もおまえを追いかけていたんだ。荷車に積んであるのは、そのあいだに乗りつぶした車輪なのさ。わしは、死神だよ」

死神がそういったとたん、ヤンは、石のようにたおれて死んでしまいました。

ねこがいつぴきやつてきて

池の中に飛びこんだ

そこへかえるがやってきた

これで話は終わりだよ

原話…『世界のメルヒェン図書館1』小澤俊夫編訳　ぎょうせい
再話…村上郁